

森鷗外のベルリン第三の下宿

——あわせて荻原雄一氏に答える

林 尚孝

鷗外は、一八八七年四月一六日から翌年七月五日までの一年二ヵ月余をベルリンで過ごした。この間、三ヵ所に下宿したことはよく知られている。第一の下宿は鷗外の氣に染まらず二ヵ月で転居している。第二の下宿は快適だったようで、一八八七年六月一五日の「独逸日記」には、次のように記されている。

今の居は府の東隅所謂古伯林 Alt-Berlin に近く、あるいは悪漢淫婦の巢窟なりといふものあれど、交を比鄰に求むる意なけれ

ば、屑とするに足らず。喜ぶべきは、余が家の新築に係り、宏壯なることなり。友人來り觀て驚嘆せざるなし。前街は土瀝青を敷き、車行声なく、夜間往來稀なれば、読書の妨となることもなし。戸主ケユチング料理店を開き居る故、三餐ともに家にて供せしむ。衛生部との距離歩程五分時に過ぎず。余復た何をか求ん。

一八八八年四月一日、これほど氣に入っていた第二の下宿を引き払い、第三の下宿に移っている。その直前の三月二三日には帰国命令を受け、七月五日にベルリンを出発しているから、僅か三ヵ月余の居住であり、なぜ

第三の下宿に移ったのかという疑問がわくのは当然である。「独逸日記」には、

四月一日。遷居す。ハアケ市場 Haackescher Markt と名くる大達の角に在りて、大首座街 Grosse Präsidenten-Strasse 第十号の第三層屋なり。室内裝飾頗美なるに、出窓 Balkon の下には大鉄盤を置き、中に花卉を植ゑ、蕙蘿之に纏ふ。書架は廉価なる故購ひ求めたる私有物なり。新に獲たる奇書を挿列し、時に意に適する簡冊を抽いて之を読む。以て無聊を医するに至る。

とあり、転居の理由は書かれていない。四月一日の後いきなり日記は五月一四日に飛び、「独逸日記」は終わる。

第三の下宿への移転により通勤の便がよくなるでもなく、第二の下宿に不都合があった訳でもない。さらに、三ヵ月後には帰国する日程が決まっているのだから、何とも不自然な行動である。多くの研究者が、この転居はエリーゼとの同棲のためであろうと推測している。石黒忠恵日記の四月二日の条に「森軍醫轉居ノ事ヲ申來ル」とあり、一二日の条には「森ノ寓ヲ訪フ」とある。この日の訪問で、石黒は鷗外とエリーゼの同棲の事実を知ったものと思われる。すなわち、四月一四日付けでベルリンから、石阪・足立両課長宛に次のような書簡を送っている。

学士連中、あまり洒落候て風流事にて、

軍人ニ如何ト被存候。軍人は秩序風紀を
貫び候事を新来ノ人へ篤と御注入被下度
候。且軍隊にて秩紀?敵守スルヲ不平ノ
人ハ、一々局長閣下へ御申立、片端より
御放手被下度候。

激しい語調で注意を喚起した書簡は、鷗外
とエリーゼが同棲していることを石黒が目撃
したと考えれば納得がゆく。

第三の下宿への転居は、その頃エリーゼと
出会ったからではないかという説がある。し
かし筆者は、それ以前に二人は出会っていた
と推定している。一八八七年十月八日、ウイ
ンからベルリンに向かう列車中で石黒・谷
口・森の三人は女性談義を交わし、石黒日記
に次の文言が残されている。

車中三人ノ懺悔話アリ。奇極ル。依例森
最モ多罪。石黒次之。谷口割愛ニ小ナリ。
石黒は蒼山と呼ぶフランス女性の現地妻の
もとに毎週通っていた。それに比べ後腐れの
ない交際をしている谷口の罪は軽く、森は最
も罪が重いとされている。これは未婚の婦人と
交際していることを示唆しているように思わ
れる。この解釈が正しいとすればエリーゼと
の交際はそれ以前から続いていたことになる。
今年になって、森千里著『鷗外と脚氣―會
祖父の足あとを訪ねて』が上梓された。曾孫
の森千里さんが鷗外とエリーゼの関係をどの
ように理解しているのかと興味深く拝見した。

「鷗外の恋人」の節で、「鷗外は恋人と別れる
ことができず、エリーゼはおそらく鷗外と結
婚するつもりで来日したのではないかと想像
している」と書いてあり、エリーゼが結婚の
ために来日したという立場をとっておられる。
「ベルリンの第三の下宿」という節には特
に興味があった。

実はこの第三の下宿こそ、鷗外が恋人エ
リーゼと青春を謳歌した時期を過ぎ、
最も思い出深かったであろう下宿なのであ
る。日記が大幅に削除されているのは、エ
リーゼとの交際の様子が日記の大半を占め
ていたからではないだろうか。

実に明快に、第三の下宿で二人の同棲生活
が営まれたとの判断である。本書により、小
金井喜美子の「金目当ての来日」説が親族に
よって否定されたことになる。その意味で画
期的な出来事といえよう。

これまで「第三の下宿の存在」については
いろいろ議論があったのに、外観や階段など
の写真を示して「第三の下宿」を新たに特定
したかのような表現に驚いた。

この第三の下宿については、鷗外につい
て調べた人が書いたある本に「戦争で破壊
された」として写真付きで紹介し、それが
一般に広がって「第三の下宿は存在しない」
と思われる。(中略)間違っで紹介され
た写真は、鷗外の第三の下宿の裏側、別の

通りに面した建物であることがわかったの
である。

最初に第三の下宿について触れたのは、篠
原正瑛氏である。一九六九年発行の『鷗外』第
五号に「この下宿の建物は、その後半分だけ
は残ったが、完全に改装されていて、当時の面
影は全然うかがわれない」という記事がある。

ついで二〇〇〇年発行の『鷗外』第六七号
に壇原みずす氏が、「ベルリン随想」及び「森
鷗外のベルリン第三の下宿」と題して詳しい
報告を載せている。これには「図1 鷗外の第
三の下宿跡見取り図概要」として間取図が
載っているほか、この建物が独立した建物で
はなく、三つの繋がった集合体であることを
記している。すなわち、グローゼ・プレジデ
ンテン通り十番地とハツケシャヤ・マルクト
四番地とノイエ・プロムナーデ三番地の集合
体住宅で、中庭空間をもつと書いている。最
後に、「現存する建物が鷗外滞在時から存続
するものと確定するのはいささか早計なのだ
が、鷗外が住んでいたと思われる部屋の構造
や組織などは、幾度かの内装にも係わらず殆
ど作り直されていないのではないかと推定さ
れる」とある。壇原氏はこの建物が第三の下
宿跡であることを示している。

「ベルリン随想」掲載の写真と「鷗外と脚氣」
のそれとを比べると改装が進んだことは明ら
かである。いずれにせよ、この建物について

の森千里さんの記述は勘違いがあるように思われる。

ところで『鷗外』第九二号には、荻原雄一氏の論稿「六草いちか氏の調査における成果と問題点―エリス、ユダヤ人論の観点から―」が掲載されている。目次には「書評」とあるが、実際は自説の再論である。

その文中に、私が名指しされ、詰問ともとれる要望を出してこられたのには驚いた。次がその個所である。

さて、六草氏は『舞姫』のヒロイン「エリスがユダヤ人であると感じる点を見出せない」と言う。エリーゼユダヤ人だけではなく、「エリスユダヤ人説」まで否定しているわけだが、その根拠を二つ挙げている。

一つはファミリー・ネームで、ヴァイゲルト姓のユダヤ人は五人しか居ない。ヴァイゲルト姓の中にはユダヤ人も居ると説明する。しかし、これまで林尚孝氏はヴァイゲルト姓のユダヤ人は皆無だと主張している。零と五の差は無人大である。どちらの資料が正しいのか。林尚孝にはきちんと反論願いたい。

これだけでは、読者の中にはこの文の意味がお分かりにならない方もあろう。実は、荻原雄一氏はかねてから、「舞姫」の主人公・エリスはユダヤ人であると主張されてきた方である。それだけなら私が出る幕ではなかった

のだが、氏は「舞姫」のモデルと目され鷗外の帰国と同時に来日した実在の女性、エリーゼ・ヴァイゲルトもユダヤ人であると断定されていたので、それを否定する私との間で論争となったのである。この論争は、荻原氏が『鷗外』第八六号で、エリーゼユダヤ人論の主張の根拠は「伝聞」によるもので、典拠は皆無であることを認められ、「もうこれ以上はいかなる反論もしないつもりです」と論争終結を宣言された経緯がある。その論争をまた蒸し返された形である。私がエリーゼ非ユダヤ人論の根拠としたのは、エルサレムのホロコースト記念館が作成した「ナチスにより虐殺された犠牲者のデータベース」および「Das Munk」が編纂したドイツ系ユダヤ人名の辞書（*A Dictionary of German-Jewish Surnames*）であり、そのどちらにも Wiegert 姓のユダヤ人は皆無だったのである。

今回、荻原氏は六草氏の著書の中に、「ヴァイゲルト姓のユダヤ人が五人」という記述を発見し、喜び勇んで、私に釈明を求めて来られたという次第である。

そこで以下、私の反論である。六草氏が「ヴァイゲルト姓のユダヤ人が五人いる」と述べられたのは一九三九年に実施された国勢調査によるものである。これはナチスによるユダヤ人狩りの基礎となった調査であるが、特徴は、純粹のユダヤ人だけでは

なく、父母のどちらかがユダヤ人である「二分の一ユダヤ人」、さらに祖父母の一人がユダヤ人である「四分の一ユダヤ人」まで補足していることである。このユダヤ人に関する定義が、五人のヴァイゲルト姓を生んだのである。『鷗外の恋』は、この国勢調査の方式を詳細に説明しており、きちんと読みさえすれば、林の主張に誤りがなかったことが分かった筈である。というだけでは荻原氏は納得されないであろうから、簡単に説明しよう。

一九三九年現在、全ドイツで五人いたヴァイゲルト姓のユダヤ人の内訳は以下の通りである。一人は未婚の女性で、非ユダヤ人である父ヴァイゲルト氏とユダヤ人の母との間に生まれた「二分の一ユダヤ人」であった。残る四人のうちの一人は女性で、結婚してヴァイゲルト姓になった方であり、その息子と合わせて二人である。残る二人は、母親がユダヤ人であった「二分の一ユダヤ人」のヴァイゲルト氏とその娘である。以上から、ヴァイゲルト姓にユダヤ人が皆無であることはこの国勢調査からも明瞭なのである。

荻原氏が、小説のエリスをユダヤ人であると判断するのはご自由だが、六草氏がエリスはユダヤ人ではないと考えられたことまで論難されるのは如何なものか。しかも同稿で、荻原氏はまたもやエリーゼユダヤ人論を主張しておられる。六草氏の著書の最大の発見

のひとつは、エリーゼがヴィーゲルト姓であり、教会で洗礼を受けたクリスチャンである事実であった。つまり、エリーゼがユダヤ人ではありえないことを、完璧に論証されているのである。

他方、萩原氏の論拠は、エリーゼが生まれたシュチェチンの町は「古来ユダヤ人が多く住んでいた町だから」というに過ぎない。その上で何の証拠もなく、エリーゼはキリスト教に改宗したユダヤ人だとまで論じている。これでは、書評に名を借りた、自己の信念の告白に過ぎないのではないか。

森鸥外纪念馆通牒

No.182 春

【編集後記】

夕方になると、毎日、数人の下校の小学生が森鷗外記念館の敷下通り側の門をくぐり、庭を経て大観音通りへと通り抜けていきます。あるいは近くの高校の生徒が「森鷗外が、ここに住んでたんだって」と言いながら団子坂を下って行きます。私は、その姿をほほえましく、いい光景だなと思いつつ眺めます。

去年は、津和野、ベルリン、小倉、文京区と、生誕一五〇年を記念する数々の事業が行われ、様々の行事が開催されました。鷗外所縁の地以外でも、講演会や展示会が開かれました。刊行物も相次ぎました。成果や影響は大きいものであったという実感があります。森鷗外の研究と顕彰の新しい時代が始まりました。これからも宜しくお願いいたします。

森鷗外記念会通信 No. 182

発行 平成二十五年四月二十五日

編集責任者 倉本幸弘

発行所 森鷗外記念会

郵便番号・一一三—〇〇二二

東京都文京区千駄木三丁目三十六番五号

森鷗外記念会事務局

電話 〇三—三八二四—九四四五

(e-mail) qqkz5f3d@solid.ocn.ne.jp